

① 因幡と伯耆を結ぶ～因伯新道紀功碑

蒲原 潤一

県庁近くの公園内(旧県会議事堂跡地)に因伯道路の開通記念碑があります(写真-1)。若桜橋のたもとにあったものが移設されたと案内看板に記されています。県内で最初に鉄道が開業したのが明治 35 年(境～御来屋)ですので、それをはるかに遡る明治 16 年に近代としての道路整備が県内で開始され、その重要性やそれに傾けられた辛苦を綴った碑文です。県内のインフラ整備鑑賞のポイントの一つとして是非お奨めしたいと思います。

本稿では、鑑賞いただくにあたって参考となりそうな情報を少しだけ紹介させていただきます。

碑文の訳文については、鳥取県公文書館作成の案内板を参照ください(写真-2)。道路整備を牽引した行政官や土木技術者達の情熱が伝わってきます。ところで、碑文にきざまれているような道路整備。当時、鳥取県で最も重要で整備を急がれたその路線はどこでしょうか。県史によれば、明治15年の臨時県議会で以下の路線の改築費が可決されたとあります。また、このうち鳥取・戸倉間、鳥取・米子間を最優先で整備する計画が作られたそうです¹⁾。(図-1)

第一種道路 鷹狩・駒帰間

第二種道路 岩屋堂・鳥取間 鳥取・米子間 安長・賀露間

第三種道路 大江・上石見間 米子・上細見間 八橋・倉吉間 関金・別所間 智頭・奥本間
倉吉・長瀬間 小波・江尾・信助間 鳥取・倉吉間 陸上・浦富間 鳥取・雨滝間
若桜・船岡・袋河原・長瀬間

島根県から分かれて再び鳥取県を作る再置運動が実って、再置後の初代知事になったのが山田信道(1833～1900)でした。その山田県令が最初に手がけたのは道路網の整備でした。物産の振興のため道路の開設整備が最優先の課題だったようです。

古来、人々は因伯の国境のどこを越えたのか

明治時代、辛苦の末に道路で結ばれた因幡の国と伯耆の国ですが、ところで往古の時代に因伯をつなぐ道はどこを通過していたのでしょうか。仮に湯梨浜町・三朝町と鳥取市・智頭町との現在の行政境をかつての因伯の国境とすると、現在の道路地図で車道らしきものが通っているのは、国道 9 号小浜、その内陸長瀬周辺(古代山陰道推定ルート)、県道泊絹見青谷線、川上峠、滑石峠付近、佐谷越え、中北トンネルとなります。このほかにも今は使われなくなった徒歩による間道が当時は多数あったのだと思われます。

往古の行き交った多数の旅人にとって、使う道が歩きやすく、また、大雨などで崩れ落ちたり浸水したりせずいつも安心して使用できることは、切なる願いだったに違いありません。それは現代にも通じる願いだと思います。現代では制度も整備され道路管理者と言われる立場で土木技術者が腕をふるいながら、道路を安全に安心して使えるよう新設や改良のほか、除雪や維持修繕などの管理を実施することに余念はありません。昭和 48 年のことになりますが佐谷越えの県道鳥取鹿野倉吉線が改良されました。山陰自動車道が開通するまで永らく鳥取市街と三朝温泉方面を結ぶ主

要道として多くの交通を支えることになるのですが、開通当時の歓喜の想いを県道沿いの佐谷峠開通之碑に感じることができます。(写真-3)

また、異常気象時なども安心して通行ができるためには複数の路線が整備されていることも大切です。令和3年度の豪雪では佐谷越の峠付近の斜面は深い積雪に覆われました。令和4年2月25日から3月4日の間通行を制限せざるを得ない状況でした。山陰自動車道などその後整備が進められた道路が迂回路となって交通のリダンダンシー(ダブルネットワークにより交通流が途絶しないこと)が発揮されたケースです。因伯間を固く繋ぎたかった人々の思いは今も引き継がれています。



因伯新道紀功碑

【碑文の一部を現代語訳にして、()内に補足文を入れています】

因伯の二州は海に沿い、山道はおよそ130里、道路は険悪でわずかに人馬を通すのみである。昔は、人も馬も(往來に)苦勞したものであつた。山田県知事は、これをあわれみ、土木課長の須永氏と話し合つて道路改修を命じた。大岩を穿ち山道を開き、高きは削り、低きは埋めて平らにした。水があれば橋をかけ、山には道をつけた。これにより、かつて草茫々の所は平坦になつて砥石のようになり、塞がつていた道もまっすぐに通じ、それはまるで矢のようである。絶え間ない人馬の往來に対して人々は喜んでゐる。そもそも、この事業は明治16年に開始され、19年に竣工した。事業にはおよそ1万人、35万5000円余りを要した。官家の深い思召しとはいえ、因伯二州の官民の力を合わせなければ、短期間での完成は見なかつたであらう。このことは、記録に残して後世に伝えなければならない。よつて、豊碑(功徳をたたえた大きな石碑)を若桜橋の側に建ててその功績を刻むこととする。

銘に曰く

西晋の杜征南(杜預)は富平津に浮橋を造り、今は多くの人が往來する所となつてゐる。また、平清盛は「経が島」を築いて輪田崎(大輪田泊)を修築し、日宋貿易の拠点にした。一時は苦勞しても後の世の利益となることは、世の人が二人をたたえていることから分かる。お金を費やすこと40万円、因伯の道路を改修すること百里。ああ、輪田崎と富平津と共に、山河が永遠に続くように因伯新道の功績は永く鼎峙(三つが安定している様)することであらう。

明治二十年丁亥十一月 從四位勲三等山田信道篆 菊池純撰文 寺西養藏書

写真-1 因伯新道紀功碑

写真-2 紀功碑の案内板(鳥取県公文書館作成)の一部



写真-3 佐谷峠開通之碑



写真-4 令和3年度冬期に雪崩の恐れのため通行止めを余儀なくされた佐谷越えの道路

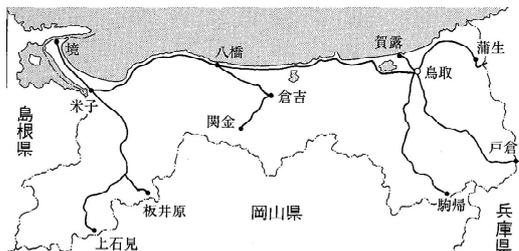


図-1 明治期の県内主要道路の開設(『鳥取県の歴史(1997)』より)

引用文献

- 1) 鳥取県の歴史 内藤正中他 山川出版社(1997)

